坪田譲治全集

11

新潮社

坪田譲治全集 第十一巻

印刷 昭和五十二年六月十五日

発行 昭和五十二年六月二十日

著者 坪田譲治

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

電話 東京(〇三)二六六—五一一一 業務部
二六六—五四一一 編集部

振替番号 東京四—八〇八

印刷・株式会社 金羊社 製本・大口製本株式会社

定価 二八〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© JÔJI TSUBOTA Printed in Japan 1977

坪田譲治全集 第11巻 目次

新百選　日本むかしばなし

本のはじめに　一〇

ふしぎな子どもたち

一寸法師　一三

竹の子童子　一六

うりひめこ　一八

はなたれ小僧さま　二二

ヒョウタンから出た金七孫七　二四

タニシ長者　二六

桃太郎　二四

三人の大力男　四一

松の木の伊勢まいり　四八

異郷ものがたり

天人子　五一

竜宮のおよめさん　五五

竜宮の馬　五七

大きなカニ　五九

灰なわ千たば　六〇

沼神の手紙　六六

かくれ里のはなし　六八

竜宮の娘　七三

竜宮と花売り　七七

鬼と山姥と山の神と

初夢と鬼の話　八三

鬼六のはなし　八七

鬼の子小綱　九一

山姥と小僧　九五

箕づくりと山姥　九九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

牛方と山姥　一〇一
山の神のうつぼ　一〇六
山の神と子ども　一一〇
松の木の下の老人　一一五
千びきオオカミ　一一六
狩人の話　一一八

兄弟ものがたり

姉と弟　一二六
海の水はなぜからい　一三〇
かしこくない兄と、悪がしこい弟　一三四
米良の上ウルシ　一四〇
タニシ　一四三
歌のじょうずなカメ　一四五
五郎とかけわん　一四九
仁王とが王　一五六
アラキ王とシドケ王の話　一五六
ネズミとトビ　一五八
馬になった男の話　一六二
となりのおじいさん
ウグイスのほけきょう　一六六
こぶとりじいさん　一七〇
サルとお地蔵さま　一七三
ネズミの国　一七四
金をうむカメ　一七九
灰まきじいさん　一八一
天福地福　一八四
ものいうカメ　一八六
だんご浄土　一八八
鳥をのんだおじいさん　一九一

さずかった宝、にげた宝
親切なおじいさん　一九六
お地蔵さま　一九七
びんぼう神　二〇〇
木仏長者　二〇一
人が見たらカエルになれ　二〇七
権兵衛とカモ　二一〇
沢右衛門どんのウナギつり　二一三
きき耳ずきん　二一五
かべのツル　二一九
わらしべ長者　二二一
恩をかえした動物たち
ネズミのすもう　二二六
スズメのヒョウタン　二二九
おじいさんとウサギ　二三〇
ネコのおかみさん　二三三
サル正宗　二三四
サルとネコとネズミ　二三六
ツルの恩がえし　二三九
キツネものがたり
むかしのキツネ　二四六
片目のおじいさん　二四七
キツネとカワウソ　二四八
モズとキツネ　二五〇
トラとキツネ　二五二
キツネとクマのはなし　二五五
キツネとタヌキとウサギ　二五六
キツネと小僧さん　二五八
金剛院とキツネ　二六〇

キツネとタヌキ　二六三
動物ばかりの昔ばなし
かちかち山　二六五
カメに負けたウサギ　二六九
サルとカワウソ　二七〇
ハチとアリの拾いもの　二七四
ミソサザイ　二七六
ネコとネズミ　二七六
古屋のもり　二七八
オオカミに助けられた犬の話　二八一
豆と炭とわら　二八五
タカとエビとエイ　二八六
カメとイノシシ　二八八
クラゲ骨なし　二九〇
とんちものと、知恵の助け
サルのおむこさん　二九三
天狗のヒョウタン　二九五
牛のよめ入り　二九七
親捨て山　二九九
頭にカキの木　三〇一
天狗のかくれみの　三〇四
きっちょむさんの話
(1) つぼ買い　三〇八
(2) 火事　三〇八
(3) ちゃくりかきす　三一〇
(4) 水がめ買い　三一〇
(5) まさかそんなことはありますまい　三一一

浦島太郎　他

（あかね書房版『日本のむかし話』より）

和尚さんと小僧さん　三六
ぼたもちの話　三九
死んでしまう毒の話　三〇
みその父の話　三一
塩ザケを池へはなす話
おろか村ばなし　三三
びょうぶをたてる話　三四
かやをつる話　三五
手あらい水を飲む話　三六
長頭をまわす話　三七
親指太郎　三〇
浦島太郎　三三
鼻かぎ権次　三七
赤いおわん　三八
ツルちょうちん　三一
オオカミのまゆ毛　三三
舌切りスズメ　三七
ちいちい小ばかま　三八
子どもと鬼　三二
花さかじじい　三七
絵すがた女房　三九
灰坊ものがたり　三九
*
あとがき　坪田譲治　三九
編集後記　三三

（箱カット・中尾彰）

坪田譲治全集 第11巻（童話五）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

新百選

日本むかしばなし

本のはじめに

郷土研究社というのから、炉辺叢書の一冊として、佐々木喜善の「江刺郡昔話」が出たのは、いつ頃のことだったでしょうか。大正末年のように思います。私が昔話にとりつかれたのは、この時からであります。

今頃、ふるさとだの、望郷だの、というと人が笑います。しかし私が文学を知り始めた、明治三十年代は、故郷と言えば、文学の大きな主題でした。

牀前月光を看る
疑うらくは是れ地上の霜
頭を挙げて山月を望み
頭をたれて故郷を思う。

これは、その頃中学で習った李白の詩ですが、私はこれを読み返しては、感にたえない思いでした。

夕空晴れて　秋風吹き
月影清く　鈴虫鳴く
思へば遠し　故郷の空

などという唱歌がはやったのも、その頃のことです。岡山郊外の田圃の中を歩きまわって、私が田圃の歌に聞き入

ったのも、その頃のことです。昔話と、ふるさとと民謡と、この三つは不思議につながって、五十年も昔から私の心をとらえました。故郷のことは、小説や童話の中で、私は沢山書きました。大抵の私の作品の舞台は、故郷だったわけであります。民謡については、今頃、毎日のようにラジオに耳を傾ける以外、方法もありません。

昔話の方は、江刺郡昔話以来、本職の童話がおろそかになるくらい、読んだり書いたりしました。一時は、彼は童話が書けないもので、昔話に逃避したのだと言う人がありました。しかし今、こうして、私の昔話を百編まとめて本にすることが出来るというのは、たとえようもない喜びであります。喜びではありますが、百パーセントの喜びではありません。それというのも、わが国の昔話には、二つの源があります。昔の本から取り出して来るやり方と、遠い田舎の辺鄙な村のといしいから聞き出して来る方法とであります。私が魅力にとりつかれた江刺郡昔話というのは、この後者なのであります。今、わが国の昔話は、その八、九分通りは採集しつくされたと思いますが、その功績は柳田国男先生と、その一門の方々の努力によるものであります。そして、私などは、その努力に寄生し、これを無断で借用し、このような本をつくったという次第であります。無遠慮に喜ぶわけには行きません。ここに謹んで、柳田国男、佐々木喜善、関敬吾その他、沢山の日本の昔話を採集された方々に、厚く御礼を申上げます。

終に、この本の百編の昔話のうち、五十編は三年前私の全集が出た時までに、面白そうなものを選んで、書いて来たものであります。残りの五十編は、友人大川悦生氏をわずらわし、系統立てた選び方をしたものであります。それに従って、この二年ばかりに私が書き綴ったものであります。

昭和三十二年八月

坪田譲治

ふしぎな子どもたち

一寸法師

むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんとがありました。子どもがなかったものですから、子どもがほしくて、ほしくて、明けても暮れても、このことばかり、神さまにおねがいしておりました。

「どうぞ神さま、指にもたりないほどの子どもでもようございますから、ひとり、子どもをおさずけくださいませ。」

すると、どうでしょう。あるとき、ほんとうに指にもたりないほどの子どもが生まれてきました。そんなに小さな子どもでしたけれど、やはり、子どもは子どもで、おじいさんおばあさんは、かわいくてかわいくて、たいへん大切にそだてました。ところが、その子どもはかしこい子でしたけれども、いつまでたっても大きくなりません。それで近所のおとなたちは、これを『一寸法師』といいました。子どもたちは、『チビ、チビ。』と、はやしたてました。

ある日のこと、この一寸法師は、都に出て出世したいと考えました。それでおじいさんおばあさんにいいました。

「おじいさん、おばあさん、わたしにしばらくのおひまをください。」

すると、おじいさんとおばあさんは、びっくりしてたずねました。

「それはまた、どうしてなんだい。」

「いいえ、これから、わたしは、都へ出て、いろいろのことを見たり、ならったりして、えらい人になりたいと思います。」

「そうか、そうか。」

おじいさんもおばあさんも心配でしたけれども、かしこい一寸法師のいうことですから、すぐにゆるしてくれました。それで一寸法師は、おわんとおはしをもらいました。おわんをかさにしてかむり、おはしをつえにしてつきました。それから針を一本もらい、それには麦わらのさやをかぶせて、腰にさしました。

そうして、

「では、行ってまいります。」

と、出かけました。すこし行くと、アリにあいました。都へ行くのには、川をくだって行けばいいと聞いておりましたから、一寸法師はききました。

「アリさん、アリさん、川はどこにありますか。」

すると、アリがいいました。

「タンポポ横町、ツクシのはずれだ。」

そこで、すこし行くと、タンポポの花のさいているところがありました。そこを横にはいって行くと、なるほどツクシが立っていました。そして、そこに大きな川が流れていました。一寸法師は、さっそく、今までかぶってかさにしていたおわんを取りました。それをこんどは舟にして、川にうかべました。はしは、こんどは、かいになりました。

一寸法師が乗るか乗らないに、もうおわんの舟は流れだしました。そして、見るまに、矢のように早く、ときにはくるくるまいながら、ときには波にゆれながら、下へ下へと流されて行きました。流れている木の枝などにぶつかりそうになるときは、そのかいでかじをとりました。一度大きなさかながきて、おわんの舟をひっくりかえしそうにしました。けれども、それは、やっと、そのおはしのかいでふせぎました。

そのうち、流れが静かになって、そして、舟が岸につきました。そこがもう都だったのです。

岸にあがると、おわんの舟はかさになりました。おはしのかいはつえになりました。針の刀をさしていることは、まえのとおりです。で、法師は、こんどは都の大臣をたずねて行きました。

「たのむ――たのむ――」

大臣のお屋敷の玄関で、法師はこういってよびました。

「は――い。」

お屋敷の人が出て見ましたが、玄関にはだれもおりません。ふしぎに思ってひっこむと、

「たのむ――たのむ――」

と、声がいたします。出て見ると、また、だれもおりません。ひっこむと、またよびます。どうにもふしぎで、玄関の足駄を動かしてみましたところ、その下に法師が立っていました。

「わたしは一寸法師ですよ。都へ修業のために出てまいりました。大臣さまの家来にしていただきとうございます。」

そんなことをいうものですから、お屋敷の人が、大臣の殿さまのところへ行って、申しあげました。

「今、玄関に、一寸法師という、ふしぎな子どもがまいりまして、殿さまの家来にしていただきたいと申しております。おわんのかさ、おはしのつえ、針を刀にさしております。そして、せいは、まったく小指ほどしかございませ

ん。」
「ほ、ほう。」
これを聞いて、殿さまはおどろきました。
「めずらしい子どもじゃ、つれてきてみい。」
それで、屋敷の人は一寸法師に、
「殿さまが会ってやるとおっしゃるぞ。」
そういって、手のひらの上につまみあげて、殿さまのところへ持ってきました。殿さまもこれを手のひらの上にうけて、
「これ、おまえが一寸法師か。」
と、目の前へ持ってきていいました。
すると、一寸法師は、
「はい。これは、殿さまですか。はじめておめにかかります。どうか、わたしを家来にしてくださいませ。」
そういって、その手のひらの上にすわって、両手をついて、おじぎをしました。これを見て、殿さまはじめ屋敷の人たちみんな、すっかり感心してしまいました。ことに殿さまは、もうそれだけで、この一寸法師が、おもしろいやらかわいいやらで、手ばなすことができなくなりました。
「よしよし、一寸法師、もう家来にしてやったぞ。」
「はい、ありがとうございます。」
また法師が手のひらの上で、両手をついておじぎをしました。みんなはまた、すっかり感心いたしました。そこで殿さまがいいました。
「これ、一寸法師、おまえに何ができるか。」
「はい、なんでもいたします。」
一寸法師がいいました。
「それでは、そこでおどってみい。」
で、一寸法師は、殿さまの手の上で、「手のひらおどり」というのをいたしました。これが、屋敷じゅうばかりでなく、大臣の知りあいから近所近辺の大評判になりました。まったくそれはおもしろいおどりで、これ一つで法師は、このお屋敷の人気者になってしまいました。だれもかれも法師をそばにおきたがりました。なかでもおひめさまがいちばん法師がお気に入りで、「法師、法師。」と、かわいがりました。
おひめさまの机の上に、おもちゃのような小さな法師のうちがつくられ、そこで法師はくらしておりました。そしておひめさまの読まれる本を一枚一枚めくる役をつとめたり、すずりのふちを綱わたりのようにわたって、遊んだりしていました。そして、毎日のようにおともをして、清水の観音さまへおまいりいたしました。おともをするといっても、歩いてついて行ったのでは、法師は人や馬にふまれる心配がありました。また、どんなことで、ネコや犬がか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com